

人間が好きまたは孤独は嫌い

坂田三允（長野県看護大学）

中島義道。哲学博士。専攻はカントを中心としたドイツ哲学。著者自身の言葉によれば哲学の教科書ではない哲学の教科書であるところの『哲学の教科書』を初めとして、ウィーン留学中の体験記である『ウィーン愛憎』、「凄絶な孤独体験をもとに敢えて孤独を選び直し、それを贅沢に活用する人生のヒントを紹介」（帯封）してある『孤独について』など著書多数。

私はそれらの著書が気に入っているわけではない。どちらかといえば、むしろ嫌いである。すべての著書を読んだわけではないのだから軽々しく何かを述べることは慎まなければならないのだと思うのだが、つい「いい年（著者紹介によれば私と同年である）をして、甘ったれないでよ」とつぶやきたくなってしまう。あまりにも自己意識過剰で、自己中心的な（としか私には思えない）その考え方に辟易としてしまうのである。それは多分、この著者がいうように自分を含む人間そのものを好きか嫌いかの違いによるところが大きいのだろう。また、幼いときから死を恐ろしいと感じ、「この広大な宇宙で死ぬとはどういうことなのだろう（『孤独について』より）」と考えて続けてきたか否かということとも関連するかもしれない。彼は人間が嫌いでは人間が好きなのだ。彼は死そのものを考え、私は死ぬときを考える。

にもかかわらず、私はときどき彼の本を手にとってしまう。反論したいことは多々あるのだが、日ごろ私が感じていることを、よくぞいつて下さったと思える部分もないわけではなく、痛快な気分を味わえるからかもしれない。ある

いはただ流れていく日常に立ち止まるきっかけを与えてくれるからかもしれない。

たとえばこの『私の嫌いな 10 の言葉』には「相手の気持ちを考えろよ！」「ひとりで生きるんじゃないからな！」「おまえのためを思っているんだぞ！」など普段私たちが何気なく口にする言葉が並んでいる。しかし、最後の章「自分の好きなことがかならず何かあるはずだ！」で「これは無責任な教師や評論家が口から出まかせに言う言葉、誰でも知っているように大ウソです。（中略）その好きなことは万引きや売春であってはいけなものですから」と彼がいうように、これらのもっともらしい言葉の奥には社会、すなわち大多数の人々に合わせて生きよと強制する意図が見え隠れする。

「不登校 10 万人以上？ 社会的引きこもり 100 万人以上？ 結構だと思います。（中略）人間どう転んでも元気に楽しく幸せにばかりはしていられないからであり、それを無理やりに『そうあるはずだ』として、そうでない人を排除していく社会は危険な社会だからです。（中略）不登校 10 万人、社会的引きこもり 100 万人をかかえる社会は、みんなが挙国一致を叫んで戦争に散っていった社会より、みんながユダヤ人を密告する社会よりずっと健全です」という著者の考え方を私はとても好きだ。ただ、私は寂しがりやで孤独でいることに耐えられないので、著者のように孤独を選びとって哲学することはできない。結局おせっかいおばさんを続けていくのだろうと思う。強制しないようにはしたいけれど。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997 年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694